

ヴィーラント

「アーガトン物語：第3巻ヒippiアスの哲学」

第3章「純粹なる唯物論者の靈魂論」

野 口 健

I. 翻訳にあたって

18世紀の教養市民達にとって、靈魂についての解明は最も興味のあるテーマであった。あのカントですらも、イデアの解明の手がかりとなるのではないかと靈魂論に真剣に取り組もうとしていた時期すらある。ましてや、18世紀の一般的教養市民達は、現代のような進化した自然科学的理論に基づく唯物論的証明なしで、啓蒙主義的唯物論の道を、ただ理性を頼りに勇気を持って踏み出したのであるから、自分達は本当に正しい道を歩んでいるのか、あるいは死んだ後に煉獄に落ちるのかと不安に駆られながらの学究的船出であったことだろう。大海原の先には何が待ち受けているのか、嵐で転覆するのか、あるいは自分は正しかったと思える結果を見ることができるのか、全くわからないまま、伝統的宗教の縛りを否定して漕ぎ出だしたわけであるから、彼らの勇気は相当なものだと言わなければなるまい。しかし、そうした啓蒙主義者達の声を直に文学作品の中に見出せる例というのは、それほど多くない。ヴィーラントの「アーガトン物語」第3巻「ヒippiアスの哲学」第3章のように靈魂論という形をとるのは異色である。古代ギリシャを舞台に靈魂の否定に熱弁を奮うヒippiアスの姿は新しい時代の新しい世界観を築いていく先陣を切る者として読者に映ったことであろう。そしてそれは、当時、新しい

世界観、新しい政治的イデオロギーを求めて右往左往していたフライマウラー達を大いに刺激したことであろう。靈魂論と宗教に対して勇気を持った決別をできるか否かが、新しい世界を知的中産階級の手で築けるかどうかを決定することになるからである。ヴィーラントは再三に渡って、フライマウラー達から結社に入ることを求められていたが、彼らはヴィーラントの「アーガトン物語」や「アプデラの人々」「ディオゲネス」、その他、さまざまな作品の中に新しい時代の新しい精神を築くための啓蒙主義的瑞兆を見ていたように思える。

18世紀の啓蒙主義にとって宗教的世界観からの脱却は、ある意味、王権による縛りからの脱却以上に大きな課題であったと思われる。なぜならば、王権の場合は専制君主制から立憲君主制、共和制へと順次段階を踏んで行くことによって王権からの解放を実現することは可能であっても、宗教的な縛りから精神的解放をすることは至難の技であるからである。「アーガトン物語」第3巻第3章は、ヒッピアスの口を通して、当時の迷信や蒙昧に対する理性の勝利としての側面を見ることが出来るものとして非常に画期的なものであると言えよう。

なお、本翻訳の底本は、Christoph Martin Wieland: *Romane*, hrsg. von Friedrich Beißner, München (Winkler) 1964である。また、本翻訳は1986年に修士論文執筆の資料として訳したものに加筆したものである。

II. 翻 訳

「アーガトン物語：第3巻ヒッピアスの哲学：

第3章 純粹なる唯物論者の靈魂論」

カリアスよ、我々はどこに至福が存在するのかを自然に問うてきた。そして、こうした答えを聞いたのである。その答えとは即ち「苦痛から解放された生活、我々の自然の要求の最も快適な充足、そして空想力、機知、さまざまな技術が我々の感覚にとり入ることができる、ありとあらゆる種類の快樂の間の断のない享樂」である。

これは人間が要求しうるものの最高のものである。さらに崇高な種類の快樂が存在するとしても、我々はそれについて想像することができたことなど一度もないので、少なくともそれを我々が所有しているなどと確信することはできない。

神々を崇拜する者達のうちで熱狂的な連中が肉体の崩壊の後に初めて至ることになる未来の至福をあてにしているということは真実である。魂とは、まあ、以前は神々のガールフレンドの一種で、神々同様に不滅であり、（プラトンがホメロスに言っているように）天球上の無限の空間を満たしている決して朽ちることのない美しきものを他の神々とともに見るためにゼウスの天駆ける車のお供をするのである。

目に見えない世界の住人達の間で起こった戦争は、靈魂達を征服された者達の失脚に巻き込む。魂達は天より下界に下ろされ、動物の肉体という牢獄に監禁され、一連の苦痛と苦悩が存在する状況の中で彼らの以前の至福を喪失することによって罪を消滅するのである。永遠の切望、即ち魂達が世俗の善人の中には見出すことのない至福への決して鎮まることのない渴望は彼ら

の以前の状況から（注：あまりにも至福の状態にあったため）苛みとなって残り続けている唯一のものである。再び彼らの根源的素地つまり霊の純粋な要素への昇華がなければ、彼らは彼らが唯一満たされることができる完全無欠のこの浄福を達成することなどあり得ない。それゆえ、彼らの死以前に叶う至福とは、ありとあらゆる世俗的物事から自発的に離れることによって、即ち、ありとあらゆる感覚的快楽のあらゆる世俗的執着とその不足を押し殺すことによってのみ叶えられる至福である。

およそ霊達の唯一の栄養となるもの、即ち主観的感覚の人間には何一つとして理解できないこの完全無欠の至福を見出せる本質的で神聖な物の観賞は、この肉体の離脱によってしか叶わない。

彼らはさまざまな浄化の程度によって、動物的肉体的な全てのものから神々の住まう超越的な天球界へと二度高められてゆく。そして本質的かつ永遠の美を、目を逸らさずにじっと観賞することで（そこからは目に見えるものの全ては影に過ぎないのだが）永遠なる者は過ごしているのである。それらは、それらがこんこんと溢れ出てきた至福と同様に、まさに無限なものなのである。

カリアスよ、おそらく、この理解が自分にとって一種の真理であるばかりに憂鬱症が嵩じてしまった人々がいることであろう。活発な感覚と燃えたる想像力を持たぬ若者達が、この過剰な炎が消えていってしまうように思われるような孤独な生活状況と、心がたぎるような対象や喜びの欠如のためにそうした天駆ける幻影の虜とされてしまうことほど簡単なこともない。というのも、その天駆ける幻影は、若者達の快楽を渴望する想像力のある種の官能によって非常に巧みに惑わしてしまうからである。そして、その官能はそれ（その官能）を生み出す魅惑的な幻影が支離滅裂で曖昧であればあるほど、

ますます活発になるのである。

しかし、夢を追って天駆けることができる人の脳の外では、夢がいくらかでも真理もしくは事実を有しているかどうかは疑問である。というのも、もしこの問題が健全な理性に任されるとするならば、この問題の検討はこの問題の良い点を捉える結果とはならないからである。

ニンフとファウヌス、ナイアードとトリトン、フリアや死者達の現象である影は無知と最も太古の世界の迷信以外のいったい誰に感謝すべきだというのか（訳者註：それらは太古の世界の迷信のおかげで存在しているの意味）。肉体の世界を我々がよく知れば知るほど、霊の王国との境界線は狭くなってゆく。昔から人間達の間で数多くの結社を結成してきた神官達なら「人間の、この驚くべきものへの傾倒によって、恐れと希望という二つの最も激しい情熱から引き出せる利点とはどのようなものか」即座に発見したに違いないなどということがありそうじゃないかと言おうとしているのではない。

我々が話題にあげているのは、その崇高な理論は何の上に成り立つのかということだ。

その理論が前提としているこれらの神々や霊達をかつて誰が見たというのか。以前、肉体がなく天上界を漂い、ゼウスの天駆ける車のお供をし、神々とともに甘露を飲んだことをいったいどの人間が覚えていようか。

さまざまな物事の実在を認識するのに霊的な世界に住まうためにどのような第六感第七感を我々は持つというのか。

それは我々の内的感覚なのか。

これら（第六感第七感）は外面的感覚のうわべを猿真似する空想力有能力以外の何だというのか。

盲目に生まれついた者の内面に向けられる目が何を見えるというのか。

生まれつき耳が聞こえない者が内面の耳で何を聞くというのか。

少女が花壇に散在する花から花輪を編むように、空想力がまさに作り出した

新しい複合体以外に、即ち人にはどんなものであるかはっきりわかることのない（実体をつかむことができない）感覚がかつて感じ取ってきたものを高度に洗練化したもの以外に、空想力が我が物顔で活躍することのできる最も崇高な檜舞台とは何だというのか。

つまり、ホメロスの描く神々の天上界の微光や美味芳香の香のもとに我々が感じ取るものとは何か。

私に言わせてもらえば、我々は想像力の中で輝きの影を見ているのであり、いわば芳しき香の影をかいでいるわけだ。しかし、我々は天上界の輝きを見たこともなければ、美味芳香の香を感じたこともない。超越的世界の創造に世俗的感覚的材料を利用することは禁じられているのである。従って、神々の世界は（私が神の表現を使おうとすると）突然その世界が引き出された空虚な母体の中へと再び回帰してしまうのだ。

自然と感覚が我々に与えてくれる快楽を犠牲にしなければならないような謎めいた快楽に到達するために我々に示されるこの理論以外に、この全き理論に疑念を抱かせる他の証拠が必要であろうか。

我々は見えないものを見るために、見えるものを我々から取り去らねばならない。つまり、我々がますます活発に想像をめぐらすことができるように我々は感じることを止めなければならないわけだ。

連中は言う、「汝らの感覚を塞げ、そうすれば家畜と同じように目で見、耳で聞くこの動物的人間でははっきりと理解することができないものを、汝らは見たり聞いたりすることだろう」と。実に優れた食養生だ！ヒポクラテスの弟子達はお前に「精神異常になるためにこれ以上良い養生食を見出すことはできない」ということを証明するであろう。

全ての霊達と霊が住まうこの世界と、我々が死後、彼らと分かち合うことを望んでいるこの至福は、詩人のニンフ、愛すべき神々、優美神（三美神）

もしくはヘスペリデスの庭やキルケやカリュブソの島、あるいは我々を喜ばせてはくれるが、現実のことと見なすことのない想像力のありとあらゆる遊戯以上の真理を持つことはない、ということはいえそうだ。

我々の長老の宗教は我々にジュピター、アポロ、パラス、アフロディーテを信じよと命じる。全く結構だ。しかしそうした神々について、どのような姿を我々に想像させようというのか。

フィディアスやプラクシテレスによって神々の造形が行われたよりも、もっと完成された方法で神々の造形を行うことなど不可能であると誰もが告白する。同様に、フィディアスのゼウスは英雄的な男性以外の何物でもなく、プラクシテレスのキュテレイア（アフロディーテの異名）は、せいぜい美しい女性程度のものであり、神々をはっきりと理解している者など、このギリシャに一人もいない。

死後に神々のもとでの永遠の生が我々に約束される。しかし我々がそれについて抱いている理論は、我々がこの世界で体験した繊細で精神的な喜びから合成されているのであり、それゆえ我々が霊の生活、霊の喜びの純粹な姿など手に入れることは決してないことは明らかだ。神々、霊もしくは我々以上に完成された者が存在し得るであろうし、また、おそらく実際に存在する、ということをお前はここで否定するつもりはない。

私の結論が示す全ては次のようになる。即ち「我々が神々や霊がどのような物かをはっきりとわかることなどあり得ないし、我々は神々や霊について全く知らない」ということになる。しかし、もし我々が彼らの様子や彼らの本質について何も知らないとしたならば、我々にとって彼らは全く存在しないのと同じように思われる。

アナクサゴラスはかつて私に星占い師のように熱狂的に月には住人がいるということを証明した。おそらく彼は真実を言ったのであろう。しかしながら、この月の住人とは、お前や私にとっていったい何なのだ。

お前はギリシャ人が月の住人に対して助けを求めたいなどと思っていると

思うのか。月には住人がいる可能性はあるが、我々にとって月とは我々の夜を明るく照らし、かつ我々の時間を測定する空虚な光り輝く円板以上のものでもなければ、円板以下のものでもない。

我が親愛なるカリアスよ、それゆえ、こうした事情が必ずあるに違いないのですが、こうした超感覚的事象が全てこうした事情によつたならば、キマイラの上に我々の生活の計画を立てたり、ナイル川の犬のように確約されていない希望を抱きつつ、希望の影を味わうために我々が実際享受することができる至福を売り渡してしまうことは何と馬鹿げたことであろうか。

人がじきに死ぬだろうという時に、それに対する保証がなされるだろうという希望を抱きつつ、自らの存在の成果を残そうとしないこと以上に愚かなこととは何か。

つまり、我々は今、生きているが、この命がなくなるだろうということを我々はよく理解している。しかしそこで、もう一つのことが始まるかどうかは少なくとも不確実なわけだ。よしんばもう一つのことが確実なことであろうとも、現在の事柄と同じ事柄を果たすことなど不可能だと言うのだ。

我々がもう一つのことにについて本当に理解するための手段を何一つ所有していないからだ。それゆえ我々が知り得る物に我々の生活を基づかせようではないか。幸福な生活とは何かを理解し、我々がその幸福な生活に到達することができる最も適確で最も確かな方法を探し求めた後で。

(のぐち・たけし 政治経済学部兼任講師)